

尻別文学歴史の会だより

蘭越町ホームページ版 : 12月号 : (平成29年12月1日/隔月発行)

花一会図書館(地域資料委員会) 編集 / 尻別文学歴史の会 協力

電話・メールアドレス

0136(57)6085(FAX 兼用)

hanaichie@voice.ocn.ne.jp

磯谷郡蘭越町蘭越町880-9

蘭越町コミュニティプラザ花一会

文：行方 洋子(尻別文学歴史の会)

蘭越人物往来

第五回 田下禎信 近代的農場経営の夢

札幌農学校本科を卒業して、近代的農場経営を志し、現在の蘭越町で「田下」地区の名を残した田下禎信について取り上げよう。

田下禎信(本名は寅治)は、新潟県南蒲原郡加茂町坂ノ下 海産物商 田下五郎七・ヨネの三男として明治5年(1872)に生まれた。彼が、21歳で北海道にやってくるに至った経緯は、よくわかっていないのだが、「加茂郷土誌」第25号の古川信三著の「北海道開拓に雄飛した田下禎信翁」を参考にたどってみる。

田下禎信が北海道の開拓を志したことには、同郷の志士、大橋一蔵の影響がみられる、という。大橋一蔵は、萩の乱、前原一誠事件に連座して、終身懲役の判決を受け、明治9年~明治14年下獄、獄中で「守備と開拓」という建言書を提出して、特赦となり帰郷した。そして翌明治15年、西蒲原郡弥彦村に設立された私立「明訓校」の校長となった。この学校は、生徒の入学資格を14歳以上とし、就学年間は5年間と定めていた。田下禎信が、この学校で学んだかどうか不明だが、明治18年10月「明訓校」は西蒲原中学と合併して県立校となり、明治19年大橋校長は辞職する。禎信が、数え年14歳なら明治18年に入学していたかもしれないが、入学していたとしても直接教えを受けたのはごくわずかな期間だったことになる。大橋一蔵は、明治19年4月、関矢孫左衛門らと共に北海道長官 岩村通俊宛てに「移民之儀ニ付願」を提出、「北越殖民社」(本社新潟県長岡町)を結成して、石狩平野の江別太に入植した。その結社の性質は、“新潟県下の大地主、大資産家を広汎に統合すること”および“商業資本が志士の気概と結びついて北海道開拓に進出した”(「越後地主と北越殖民社」山本敏著)ということである。若い禎信は、近くの村(白鳥)に起こった北海道開拓移民という出来事、しかも大橋校長の理論のみならず果敢に実践する姿に刺激と感銘を受けたに違いない、ということかもしれない。

田下禎信が札幌農学校に入学したのは、明治26年、農学校の第19期生として、農業経済学を学んだ。同級生に、5,6歳年下の有島武郎や森本厚吉がいた。卒業は明治34年で、卒業論は、「北海道ニ於ケル新墾農場設計」である。有島武郎の「鎌倉幕府初代ノ農政」や森本厚吉の「農民ニ関スル研究」に比べると、少なくともテーマは、かなり実際の、具体的であ

るように思われる。

明治 31 年、田下禎信は、在学中にもかかわらず、父親 五郎七と共同で上目名原野 69 万坪（230 町歩余）を予定存置（3 年間猶予期間がある）により土地を確保した。これは、移住者が競合しないようにあらかじめ一定の土地を留保しておける制度で、居住地の知事の証明を受け、道長官に出願するものだ。田下親子が、磯谷郡のこの地を開拓地と見定めた経緯はよくわからないが、北海道鉄道会社が上目名を含む現田下地区付近の鉄道用地の測量を開始したのが明治 31 年であるということと関係があるかもしれない。在学中に、貝殻沢の南側に農場事務所を設け田下鹿造（禎信の兄弟）を管理人とした。開拓はまず樹木の伐採を伴うが、造材人夫を多数入れて、伐採した木を目名川から尻別川に流送した。小作人として新潟から移住した人たちは、過酷さから全員帰郷してしまい、近隣の農家からの希望者を入植させ入植者は、次第に増えていった。明治 33 年～36 年にかけて上目名の森林を牧場用に、また目名原野一部を畑用に次々と貸下げ申請を行い開拓地は拡大していった。明治 34 年、禎信が農学校を卒業して南尻別村に移住したとき、熱郭から南尻別村に至る国道の建設工事がちょうど始まったころでもあったので、駅逓所を任された。「貝殻沢駅逓所」は、国道や鉄道の工事関係者など多くの宿泊者の便宜のために繁忙を極めた（明治 39 年から中目名へ移転、明治 44 年廃止）。そして駅逓所に、官馬 5 頭を貸与されたことから、馬の育成の取り組みを開始する。馬は、農場開拓にとって必要なばかりか、木材搬出、鉄道など工事関係には必須であり、郡界（上目名）に牧場を整備して馬産と農耕馬の体格の改良へ発展していく。

禎信が、南尻別村に定住して 3 年、明治 37 年 10 月ようやく鉄道が開通した。

この年 5 月、田下は木工場を開設する。

工場には、米国製帯鋸 8 インチ、7 インチ、5 インチ各 1 台ずつ、丸鋸 52 インチ、38 インチ各 1 台他各種の小型の鋸類と動力 80 馬力のタービン 1 台、80 馬力の蒸気エンジン 1 台、乾燥用ボイラー施設を持つ全道屈指の木工場と称せられた。その他の建物は、五戸建長屋 5 棟、幹部級長屋 5 戸、共同飯場数か所、浴室（20 名以上使用可）などがあった。

従業員も本州から多数募集して最盛期 80 数名が従事していたという（目名郷土史より。施設の完備は大正 2 年）。周辺の山から木を伐りだし、3 か所の原木貯蔵池を経て、工場で製品化（鉄道枕木、漁業用箱材、建築材など）して、鉄道の「田下木工場讃岐線路待積所」で客車の運行を縫って積み込み、函館や岩内方面、更には海外へと出荷された。もとは、農場として認可されたが、開拓の初めは伐木であり、それを先進的な機械で製材し、鉄道網を利用して運搬・販売し利益を上げることに成功したのは、田下禎信の先見の明による、農場経営の企図であったのだろう。林業・木工業・畜産をしながら、本業の農場づくりに取り組んだ。

開拓当初、大豆、小豆、菜豆、アワ、キビ、ソバ、ナタネ、馬鈴薯、トウキビなどを植えながら畑を完成させつつ、明治 45 年ころからぼつぼつ稲の試作がはじまった。そして大正 8 年田下禎信が、北海道拓殖銀行から 30 万円の融資を受けて本格的な造田（100 町歩）に取り掛かった。田下地区で初年度は 9 反歩、大正 12 年には 70 町歩、讃岐地区では大正 10 年に 35 町歩の水利権許可があり、大正末期に至っていよいよ稲作が本格化した。それに従って、それまで小作人は、馬鈴薯で地主に納めていた小作料が、米に代わり、1 等地は玄米 5 斗、2 等地は玄米 4 斗などの支払いになった。残りは肥料代及び借金に回すのが新田時代のやりかたで、農家は、反収は少なく、打ち続く冷害などにより毎年苦勞の連続であった（目名郷土史）。そのような農家の窮状を救うべくいろいろな副業が次々と導入されていく。

除虫菊の栽培は、そもそも田下禎信が植えていたものが、広がったといわれている。どこから入手したかは判明していないが、新潟県長岡市から明治 21 年に石狩花畔村に移住した金子清一郎が、明治 25 年、和歌山県の上山英一郎（金鳥創業者）から除虫菊の種子を取り寄せ、明治 36 年には花畔村で 1 町 2 反を作付けたことから、道内各地に広まっていた、とされている。金子清一郎は「北越殖民社」社長の関谷孫左衛門とは昔から親交があったことから、その経緯で田下禎信が早々と除虫菊を入手できたのかもしれない。ともかくそれが近隣の農家間に広まり、大正から昭和初期にかけて全盛期を迎えた（昭和 9 年南尻別村全体の栽培面積は約 255 町歩）。「もっとも生産の多かった昭和 10 年 11 年には、北海道総生産量の 1 割が目名産であったといわれるほどになった。・・・除虫菊は主として和歌山県に送られたそうでこのころ水田は冷害続きなので農家は少しでも荒地を用いて菊を植えた」（目名郷土史）。そしてその後、萎縮病や土地の酸性化に加え殺虫剤の普及などで、昭和 14 年ころから価格が下落していき、生産は途絶えていった。

また養蚕も導入された。南尻別村の養蚕は、早くは明治 36 年、木村才一郎らが本目名（名駒）に「養蚕伝習所」を設立していたが、田下は、もともと野桑の多いところであり「生桑培養を行い養蚕地からの入植者を巡回指導に当たらせ好成績を上げるとか、繭を買い取り、糸を紡ぎ・・・」（上記加茂郷土誌）とある。田下禎信は、座繰機械や踏機械を購入して製糸に力を入れた。明治 41 年、繭乾燥場を新築し、翌 42 年、稚蚕共同飼育場を建て、養蚕戸数は 32 戸に上った。ちょうどこのころ、明治 41 年、札幌農学校の同窓生、有島武郎が田下の家を訪問したが、田下のトネ夫人が、客人への対応もそこそこに蚕部屋に行ってしまう様子がかかれて（「観想録」14 巻）。また、明治 38 年、「新潟県立輸出羽二重精錬所」が加茂に設立され、田下は、紡いだ糸をここへ送って品質を検査してもらったのではないかとされている。大正 13 年、貝川（平田農場）に繭共同乾燥場を建て、一帯は、道内屈指の養蚕地と呼ばれるほど全盛期を迎える。しかし昭和に入って、繭値が下落、また一説には除虫菊栽培の弊害（殺虫剤原料と蚕）もあって、衰微の道をたどっていった。

さらに、大正初期から中期にかけて、デンプン好況で、各地にデンプン工場が建てられたが、田下も、数人で水力による共同デンプン工場と製粉所を建て、最盛期（大正 7 年）約 30 町

歩の馬鈴薯栽培をしてデンプン 1500 袋を生産した。第一次世界大戦の影響で 1 袋 17 円に暴騰した年であった。その後価格は下落していき、大正末期には工場を閉鎖した。

その間、木工場は、明治 43 年失火で全焼するが、翌年には再建を果たし、大正 2 年、発電施設を設計し、完成させたが不許可で通電することはできなかったが、その他全施設、設備の完成を見た。ところがこの年 8 月 30 日、豪雨により河川が増水し、目名駅を通過後の函館行夜行列車が田下の鉄橋を通過して、上目名の手前で線路が山崩れのため、土砂で埋まってしまい、仕方なく目名駅に引き返そうと再び田下の鉄橋に差し掛かると、鉄橋の上流にあった田下造材部木材集積所の堰が決壊して、集積材が流失し、鉄橋を破壊した。列車は横転、先頭から 2 両目は落下して、死者 7 名、負傷者 67 名を出す大惨事となった。この時、田下禎信らは、豪雨の中、夜を徹して救出活動に励み、鉄道大臣から人命救助で感謝状を受けた。

翌月には、上目名駅が設置された。それまで目名駅と熱郭駅間は、駅区間が長く、冬季の降雪が甚だしかったという理由のほかに、付近に 1200 町歩ほど田下所有の森林があり、その木材の搬出も見込まれたようである。その後大正 4 年、それまでの路線から新しい路線に変更する計画が立てられ大正 6 年、新路線（現在のもの）が完成した。田下木工場は、製品の積み出しは、馬櫓や馬車で駅まで運搬した。田下木工場は、新製品の合板ベニヤの試作に取り組み、横浜の商館との取引も決まったが時節柄うまくいかず、大正末期から木工場の経営が不振となり、ついに昭和 4 年閉鎖した。

また、田下禎信の名を知らしめたのは、宮内大臣と北海道長官より天皇陛下に単独拝謁を仰せつかったことだろう。昭和 11 年 9 月 21 日に行われた陸軍特別大演習に際して功労が認められてのことだった。演習は、黒松内を出発する「弘前 31 連隊」と尻別（港）を出発する「青森第 5 連隊」が、紅白に分かれての白兵戦で、田下付近で戦い、銃鑑部が優劣を判定するというもので、地区の人々は全員早朝からお茶の接待、弘前連隊の秩父宮殿下の休憩対応などの活動に精を出した。残念ながら田下禎信は、このころすでに病気で拝謁はかなわなかった。

昭和 14 年 8 月 18 日 田下禎信は、字田下で死去した。67 歳であった。田下集落の国道 5 号線沿いに「田下禎信翁碑」（北海道帝国大学名誉教授 高岡熊雄）が立っている。故郷加茂町の禎信の長兄 元平の長男 田下政治（禎信の甥）は、禎信に憧れて明治 33 年札幌農学校に入学し、昭和 17 年衆議院議員になった、という。父親 五郎七の財力による農場取得を見ても、禎信は、田下家一族の繁栄をも担っていたのだろう。